

アの負傷に病院のご協力もいただいた。

一方、ボランティアの活動資材等に必要、ボランティア活動支援金の募集をお願いしたところ多くの支援金をお寄せいただいた。

以上のように、全く、手探りから始めた「社協災害ボランティアセンター」であったが、皆さま方のご協力のお陰で、なんとか機能することが出来た。

3. 2度目の災害復旧ボランティア活動

2度目の時には、初めから新居浜市災害対策本部（以下：災対）と社協は協働態勢をとり、社協に設けられた災害ボランティアセンターのミーティングには毎日、災対からの参加があり、センター運営の意思疎通、活動・被害状況、ニーズ把握、物資供給など情報共有が図られ、社協のやるべきボランティア活動と災対がすべき行政の役割を整理・実践することが出来た。

被害が市内全域に広がっていたので、災対（特に市民活動推進課）と連携し自治会単位での身近な住民相互の助け合い活動を促しました。市民意識も変化が生じ、1度目は土嚢がないと消防署などに電話して早く持って来

てくれないかなど他力本願だったが、災対の働きかけもあって、2度目は自分で土嚢を作るようになった。自治会を中心とした助け合い活動も始まり、センターはその支援が主な役割になっていった。実は台風の直撃はもう1度あった。全国的に大きな被害を及ぼした10月20日の台風23号の時は、事前に洪水の原因になりそうな流木を取り除くというような建設業協会の活動やいち早く声掛け助け合い避難したり、土嚢を隣近所で積み合う住民の動きが被害を軽減した。

災害復旧ボランティア活動としては、前回同様、県内外を問わず多くのボランティアにご協力をいただいた。なかでも、フェリー会社、入浴施設、宿泊施設の方々に賛同頂き実施した「ヘドロかき出しツアー～大阪南港から四国新居浜へ思いをつなぐ～」では、関西からきたボランティアに活動への元気をいただき被災者の心の癒しや復興へ向けての勇気、ボランティア間のネットワーク拡大へとつながった。

また、活動資材としては、スコップ、一輪車を建設業協会、長靴、ゴミ袋、飲料水等を企業などからご協力い



ヘドロかき出しツアー



センター閉鎖



建設業関係のボランティア

ボランティア活動総数

	8. 18	9. 29	計
高校生（市内）	2,618	2,303	4,921
高校生（市外）	314	50	364
教師	290	152	442
中学生	228	57	285
小学生	6	15	21
県職員	418	81	499
一般市内	2,813	793	3,606
一般市外	942	990	1,932
一般県外	600	442	1,042
計	8,229	4,883	13,112